他異権・難民・ヘテロトピア・文化価値摩擦

—スウェーデンの難民大量受入れ問題—

石 渡 利 康

Toshiyasu ISHIWATARI. The right of being different from others, Refugees, Hetrotopia, and Cultural value friction: In the case of Sweden. *Studies in International Relations* Vol.36, No.2. February 2016. pp.23 – 30.

Swedish Migration Agency (Migrationsverket) says that all asylum seekers arriving to Sweden are entitled to have their asylum claim examined. This paper examines the problem of refugees from the four key notions, namely, right of being different from others, refugees, heterotopias, and cultural value friction.

1. 問題の所在

私は、北欧法と北欧地域研究を主たる専門分野としている関係上、北欧諸国の新聞やテレビ報道に毎日欠かさず接している。また、現地の友人・知人とメールやPC画像電話スカイプで連絡をとり、様々な情報の収集に努めている。こうした状況の中で、昨今の報道や会話として大きな地位を占めるのは、主として中東のシリアから特にスウェーデンへの難民流入問題である。

実際、flykting（難民）とかinvandrare（移住者）という言葉が聞こえて来ないスウェーデンの報道はほとんどない、といっても決して過言ではない。2015年は、まるで南から北への民族大移動の年である感じさえする。そして、難民受入れに対する行動を通して、今まで影に隠れてよく見えなかった北欧諸国の社会深層心理が浮かび上がって来るのである。

この小論は、スウェーデンでの難民受入れ問題を1つの切り口として、「他異権」の問題と利他主義、ヘテロトピア、価値摩擦、文化融合といった関連事象を少しばかり考えてみようとするものである。スウェーデンを中心にしたのは、難民受入れ問題に関して、他の北欧諸国と比較して非常に「熱心」というか、ほとんど「異常」に近いからである。他の北欧諸国は、これに反してかなりリラクタントな姿勢を示している。

問題が多岐にわたるので、本評論のトピックも散在的にならざるを得ない。考察の方法論は、歴史学、文明論、国際関係学、地域研究などをほんの少しずつ用いたクロスカルチュラルなものである。

本稿の内容に関しては、断り書きが必要である。本稿を執筆し終えたのは、2015年の10月である。言うまでもなく、難民受入れ問題は、極めて流動的である。本誌が発行される来年の2月の時点では事情が変わっており、本稿の記述の一部が古くなり若干の外れになる可能性がないわけではない。しかし、国際関係事象のような変動的な事項に関しては、そうしたことが常に起こり得るので仕方がないことである。

2. 新概念としての「他異権」

「他異権」という用語は、辞書を引いてもない。勿論法律用語辞典にも載っていない。それもその筈である。他異権は、ある存在が他と異なっている状態を表す「他異」に権利の「権」を付けた私の造語だからである。造語のきっかけは、droit d'être different des autresというフランス語が急に頭に浮かんだことにある。

他異権とは、簡単にいえば、ある主体ないしは客体それ自体、あるいはある主体ないしは客体の属性が他人あるいは他人の属性と異なっている状

態が社会的保護の対象として意識され、権利として認められたものである。人の集合体にも、他異権は認められる。権利性が所有権のように100%認められるかという質問に対しては、成熟途中にある、とだけ答えておこう。

しかし、デンマークの法哲学者であるアルフ・ロス（Alf Ross）がTu-tuの理論で明らかにしたように、権利は実体を欠く方向指示機能をもつものなので、法理的に他異権を用いることにいささかの不合理性もないのである。

そもそも、他異権などという権利が、考えられるかと訝る人がいるかもしれない。しかし、権利は既定の所与のものだけではない。権利概念は、社会の発展に伴って新たに作られるものなのである。このことは、例えば女性の地位の向上につれて、性の自己管轄的人格権という意味で「性権」という概念が生まれてきたことを考えれば理解できるのである。他異権は、英語ではright of being different from others, スウェーデン語にすればrätt till att vara olik från andraということになるであろう。もっとも、これも造語だから、法律家でなければ支障なく法的理解に至ってくれるかどうか若干不安なところがある。

今私の頭の中にあるのは、こうである。個々人あるいは一定の集団はお互いに違っている。したがって、その違いを法的局面においては相違として率直に認め、ある場合にはそれに対して法的保護が与えられるという考え方である。

最近少しづつ見られるようになった、同性婚の承認などその好例であろう。これは、生き方に関する自己決定権の表象でもある。スウェーデンにいる難民も、他異権をもつと考えられる。

他異権が認められたとしても、それは無制限なものではない。他の種類の権利に何らかの制限が付いているように、他異権にも社会的制約が認められるのは当然である。

3. 他異権とヘテロトピア

他異権とヘテロトピア（heterotopia）は、奇妙な結び付きであると感じられるかも知れない。しかし、決してそうでない。難民や移民を例として

取り上げよう。

スウェーデンに来る難民は、俗にシリア難民と呼ばれている。しかし、難民はシリアだけから来るわけではない。北アフリカ諸国、アフガニスタン、パキスタン、バングラデシュなどからの難民も多い。難民の中には査証や身分証明書など所持していない者もいる。出身国に関する正確な統計は無いに等しいのである。さらに、難民であると自称している者でも、実際はより良い生活を求めての移民である場合もある。非合法組織のメンバーや犯罪者が混ざっている可能性もある。

難民と移民との違いは何か。1954年発効の「難民の地位に関する条約」第1条によれば、難民は人種や政治的な理由で迫害される恐れがあり、母国を逃れた人である。これと違って、自らの自由意思で外国に移る者は移民である。

難民は、難民として認められ、様々な法的保護を受ける。難民は、受入れ国において、いわば他異権を認められるのである。他異権をもつ難民は、異文化の受入れ国スウェーデン社会で一種のヘテロトピアを構成する。

ヘテロトピアとは、社会制度そのものの中で構成された異化空間（場所）で、ギリシャ語のἑτεροῦ δὴ τόποςが語源である。フランス語にすればheterotopieで語頭のhはアッシュ・ミュエだからエトロトピアである。

フランスの哲学者ミシェル・フーコーが1967年にある会議でDes espaces autresとして使用以来、ヘテロトピアという概念は様々なコンテクストの中で用いられるようになった。上述のヘテロトピアの定義をさらに分かりやすくすると、ヘテロトピアとは、現実の人間生活の中で、日常から断絶した異化的な他所である。

そのような異化的な効果のある場所としては、例えば、植民地、監獄、墓場、精神病院、売春宿、図書館、老人ホーム、祝祭空間、博物館などを指摘することができる。それに、他異権をもつスウェーデンにおける難民も、ヘテロトピアを形成しているといえるのである。

4. 中世欧州の他異権の発現－漂泊民と乞食

ここで少しばかり横道に逸れるが、実体としての他異権の歴史的存在について書いておこう。これは、他異権に関する理解を容易にするためである。

中世の欧州には、もちろん他異権という概念は存在しなかった。しかし、他異権の内包に相当する実体は存在していた。その典型的なのは、漂泊民と乞食である。

漂泊民として有名なのはジプシーである。現在では、ジプシーが蔑称であるという理由でロマという呼称が一般的になっているが、ジプシーという呼称を好むロマもいる。少なくとも私がワルシャワの小さな広場で出会い、コーヒーを振舞ってくれ、音楽を奏で、友人として遇してくれた思い出に残る数時間を過ごしたロマの一群は、そうした意見をもった人達であった。

西暦1000年頃、イスラム勢力によって荒廃化したインド北部を出て西に向かった遊牧民のジプシーは、すでに数世紀後にはコンスタンチノーブルに姿を見せていた。やがてその人数は増加し、現代ではルーマニアを初めとして欧州各地、アフリカなどに1000万人を数えるといわれる。

ジプシーの歴史は、庇護から迫害への歴史である。最初、彼らは、神聖ローマ帝国の皇帝ジギスムントから聖なる乞食である巡礼者として「特許状」を与えられた。この時代の欧州は、当時のイスラム文化の多様性を受けて好奇心をもってジプシーの異質性を受け入れたのである。これは言い換えれば、他異権の承認である。

しかし、15世紀になると特許状は無効とされ、ジプシーは都市部への移動を禁止されるようになった。18世紀以降は、ジプシーにとっての苦難の時代である。奴隷化、強制定住、傭兵、ユダヤ人と同様の下等人間視、ナチスによる強制収容と処刑、土地所有の禁止、指定居住地への囲い込み等、その数例である。

現在でもジプシーは、欧州で異端視されている。年長者への独特の尊敬の念（patjiv）を欠かないことを名誉の1つとし、移動の自由を保つことを最高と考える彼らの社会は、明らかに欧州社会の

中のヘテロトピアである。

そうしたジプシーだが、欧州の音楽や芸術文化に大きな影響を与えた。ハンガリーの音楽チャルダッシュ、スペインのフラメンコ、ロシアのロマンス歌謡はジプシーなしには存在しなかった。それにヨハン・シュトラウスII世の母方はジプシー系だし、俳優のチャーリー・チャップリンの母方の祖母もジプシー系である。スウィング・ジャズのジャンゴ・ラインハルト、スウェーデンの作曲家でアコーディオンの名手カッレ・ユールボーンなど、これまた、ジプシー系である。

あまり知られていないが、英国には漂泊民として、外来のジプシーとは別に固有のトラヴェラー（traveller）と呼ばれる人たちもいる。彼らは、基本的には漂泊民だが現在は定着している。彼らの起源については明らかでないが、ケルト民族が渡来する前にアイルランドにいた先住民だともいわれている。そのため、Irish travellerとかItinerantsとも呼ばれる。彼らも、ヘテロトピアを形成している。

中世の欧州において、乞食は特殊なヘテロトピアであった。キリスト教支配の下で、乞食は人々が施しの善行を行う不可欠の対象として存在していた。ある時期、フランクフルトの課税表には、乞食は職業として認められていたのである。

5. 「文明の衝突」から「文化価値摩擦」へ

本筋に話題を戻して行こう。

小国に分裂していたドイツでプロイセン国王を皇帝としてドイツ帝国が成立したが、1870年カトリック教会が教皇権を強化し、国家対教会の対立になる危機が生じた。ドイツ帝国宰相ビスマルクは、ドイツ帝国の統一を妨げるものとして、1871年から1878年にかけてカトリックを封じ込めるための政策を行った。「文化闘争」（Kulturkampf）としてよく知られているが、これは一般国政文化価値と教会文化価値の摩擦の顕著な1例である。

現代においても、様々な衝突や摩擦が指摘、予見された。フランシス・フクヤマは『歴史の終わり』で、民主主義と自由経済が続くという考えを提示した。

これに対して、サミュエル・ハンチントンは、『文明の衝突』において、冷戦後は共産主義と民主主義に代わり、西洋文明、イスラム文明、中国文明、日本文明、インド文明、ラテンアメリカ文明、アフリカ文明に分け、イスラム文明と中国文明に対抗するため、アメリカ、欧州、日本は協力を強化しなければならない、と説いた。

ごく最近では、ソ連の崩壊を予測し、国家の基礎構造をなす家族制度からEUの弱点を論じているエマニュエル・トッドが、ギリシャの経済危機、難民の欧州への大量流入の最中に、EUとユーロが欧州諸国を閉じ込め、ドイツだけが得をするとした『「ドイツ帝国」が世界を破滅させる日本人への警告』（2015年）が、国家対国家、国家対EUの関係を鋭く分析している。これを見ても、文明の衝突というより、文化の摩擦の感じが強い現在である。スウェーデンによる難民の大量受け入れがもたらす結果も、文化価値の摩擦に思われる。

6. スウェーデンの難民受け入れの実態

難民に関する報道に接すると、心が痛む。それと同時に、難民受け入れに熱心であると言えば聞こえがいいが、スウェーデンの熱心さは度を越している、異常とも言えるまでに高まっている。これは、決して過言ではない。その異常性について、日本のメディアではあまり報じられていないので少し述べる必要がある。

2013年9月、スウェーデン政府は、入国を希望するシリア難民を全部受け入れる旨宣言した。欧州で初めての宣言である。一時的滞在許可の他、申請すれば永住権を与えられるのである。こうして2014年には、難民の地位申請者の数は8万人にのぼった。今年の難民申請者数は、16万人と推定されている。場合によっては、19万人になるかも知れないという。難民申請が難しい旨の警告を国外の新聞に出したデンマークとは、大きな違いである。

スウェーデンの難民、移民の数は1990年代から計算すると100万人に近く、全人口950万人の約2割である。この中には、兄弟国である北欧諸国からの移民も若干含まれる。もっとも彼らは、同質

の文化をもっているから実際は移民としての意識はないに等しく、隣の県から来た位の感覚である。

政府がこのように難民受け入れに積極であるのに応じるように、2015年9月6日にストックホルムで難民受け入れ促進大会が開かれ、1万5千人が集まった。同様の集会在第2の都市イエーテボリでももたれ、1万人が氣勢をあげた。

さらに、驚くことは、数人の警察官が「シリア難民よ、君たちは友達だ。安心してスウェーデンに来たまえ」という趣旨の意見をyou tubeに出したことである。いくら表現の自由があるとしても、私達から見れば明らかに度を越した行動である。

かなりの数の難民がEUに流入する一因にシェンゲン協定の存在がある。1985年のシェンゲン協定は、人の移動の自由の下に、協定調印国では人の移動の自由が保障され、第3国人もいったん調印国に入国を認められれば、調印国内での自由移動が認められるとしている。シェンゲン協定加盟国は現在26カ国であるが、英国は非加盟である。様々なルートでドイツに入った難民のかなりの人数は、さらにシェンゲン協定加盟国のスウェーデンへと北上するのである。

スウェーデン国民の約3分の2は、難民大量受け入れ賛成である。ちなみに、ドイツでは大量受け入れに危機感をもつ人が旧西ドイツでは36%、旧東ドイツでは46%という高い数値を示している。

スウェーデンへの難民は、大抵バルト海を横切って大陸から大型船で第3の都市マルミョーの港へ上陸する。その人数は何百人単位である。大人ばかりでなく ensamkommande barn と呼ばれる、家族と一緒にではなく単独でやってくる10代の子供も多い。彼らは、多くの場合グループを構成している。

難民の中にはスウェーデンに留まらず、フィンランドへ向うトランジット難民もいる。ストックホルム中央駅には、毎日何百人もの難民がやってくる。トランジット難民に対しては、Migrationsverket（難民・移民庁）や地方公共団体は法律上経済的援助をする権利をもたない。これを憂いて、9月25日には、ストックホルム市財政長官カーリン・ヴァンゴードが、「緊急時においては、法を無視し援助してもいいのではないかと」政府に質したが、

ここまで来ると、法治主義の破壊思考であるとしか言いようがない。

7. 受入れ積極要因

なぜ、スウェーデンはこれほどまでに難民受け入れに熱心なのか。その理由をいくつか考えてみよう。

第1は、人権保護意識が強いということである。外国人差別は皆無だとは言えないにしても、最も少ない国の1つである。唯一の例外は、ジプシーに対する差別観であろう。

第2は、利他主義（altruism）が社会の根底にあるということである。利他主義は素晴らしいが、相互的なものでなければならぬのは当然である。

第3は、かつてスウェーデン自体が貧しかった時代にアメリカに多くの移民を送り出した歴史的経験が、今度は難民、移民の受入に非常に好意的に作用しているということである。

第4は、国際協調性が強いということである。今回の難民受入に関しては、あたかもドイツと歩調を合わせているかのように見える。第2次大戦中ドイツに支配されたデンマークやノルウェーと違って、戦時中立を貫いたスウェーデンにはドイツに対する心理的反感はない。しかも、戦時中立国の義務に反して自国領土の通行をドイツ軍に認めたように、ドイツ鼠兎の感じが否めない。コペンハーゲンの博物館にある対独レジスタンス展示は、スウェーデンにはないのである。

第5は、外国に支配された経験がなく、国民も同質文化の中で生きてきたので、異質の文化と宗教の混在がいかに困難であるかの認識度が低く、多文化共生の実現をナイーブに信じ込んでいることが挙げられよう。この場合ナイーブとは、マイナス的意味である。世界を悪い目で見ない純真さは、場合によっては「とろくささ」ともなり得るのである。

第6は、植民地をもった歴史もないので、心理的に負の遺産を感じていることもないのである。植民地をもっていた英国やフランスは、旧植民地の人々との間の様々なやりとりを通して国際関係の中で強かさを身につけている。そうした経験が

スウェーデンにはないので、強かさにも欠けているのである。

第7は、「スウェーデンらしさ」（svenskhet）に対する求心性が少なくなってきたことである。国際関係におけるスウェーデンらしさとは、平時においては中立政策、戦時においては戦時中立の国是であり、それなりの評価と尊敬を受けてきた。ところが、ごく最近ではNATOへの加盟問題が論じられたりしている。これも、スウェーデンらしさの喪失を意味するような気がするのである。

8. 文化価値摩擦

難民や移民は、スウェーデンでは他異権をもつが、諸種の局面に見出させる難民ヘテロトピアを構成してる。難民はスウェーデン語を理解しないから、難民同士で集団を形成する。その結果、居住地分離現象が起こる。

ストックホルムを例にとれば、市内には非移民のスウェーデン人が住み、地下鉄の終点の郊外の町では難民、移民が住民の大半を占める。一種の住み分けである。その結果、そこでは難民でない先住の小学生などが正式なスウェーデン語を話せなくなったりする事態が発生している。これは、国語としてのスウェーデン語の混合言語化現象である。

宗教も作用する。難民の多くはイスラム教徒である。イスラム教徒の習慣、思考、人権観、服装、男尊女卑的行動などは、男女平等社会を達成しているスウェーデン社会とは相容れない。

難民は、スウェーデンでは、衣食住が保障され、小遣いまで支給される。至れり尽くせりである。これだけ手厚く遇しても、住居が都市部でないことを不満として、ハンガー・ストライキを行ったりする。理解に苦しむ現象である。

こうした行動をとる難民には、感謝の念が欠如している者がいる。富める者は貧しい者に施し、すなわち喜捨をするのが当然だから、施しの善行の機会を与えられた富めるものが感謝すべきである、というイスラムの教義を持ち込んでいるのではないかと思ったりする。

さらに、最も忌むべき事件も起きている。イス

ラム難民・移民による性犯罪である。こうした情報は、日本のメディアにはあまり伝わってこない。犯人は、肌を隠していない白人女性は男を欲しがっている、という解釈をしている。祖国で婦女暴行をすれば、血の復讐を呼び起こす。スウェーデンでは、刑務所に送られても3食付きで重労働もない、気楽なものだ、と嘯いている。

難民、移民による性犯罪発生率は、極めて高い。スウェーデン国民もあまりこうした事を知っていない。というのも、1987年3月21日にジャーナリストと組合との間で、特定の記事掲載を制限できるとの取極めがなされているからである。難民による性犯罪を詳しく報じれば、難民憎悪が起きるので、メディアが自己規制をしている感じさえある。

入国した難民のうちの難民申請をしていない1万人の所在が明らかでないという報道もあるが、難民・移民庁はそれを危機とは考えていない。テロリストが混ざっている危険性だってあるのに、信じられないような危機管理意識のなさである。

こうした諸点を総合して言えることは、スウェーデンの目指した多文化共生、統合政策(integrationspolitik)は成功していないということである。ある評論家によれば、2030、40年代には国民の半数近くが外国出身者およびその子孫によって占められるだろうというという予測がある。それをどのように評価するかは、スウェーデン国民自身である。

自国民を犠牲にして、国際的に密度の濃い交流のあまりない国の難民、移民の無計画とも言える受入に反対している政党もある。社民党を中心とする現連合政権に対して、第3番目に大きい政党「スウェーデン民主党」である。ジミー・オーケソンを党首とするこの党は、政権を担う社会民主党やその支持者などからは極右政党であるとかネオ・ナチであると評されているが、見当違いも甚だしい。

スウェーデン民主党は、まずスウェーデン人のための福祉を考えている至極真っ当な理念に基づいている政党である。難民援助を排する訳ではないが、まず自国民の利益を考えるのが政治家の任務である、と主張しているだけである。

現在のような難民政策を続ければ、スウェーデ

ン社会が大きな損害を被ることは目に見えている。簡単にいえば、難民受け入れによって自国の老人、弱者に対する社会福祉に大きな皺寄せが来ており、さらに財政が圧迫され伝統ある福祉社会の根底を揺るがしかねない事態を招いているということである。その兆候は、すでに現われている。

JAICAの前理事長だった女性が、我が国は積極平和外交でもっと難民を受入れるべきだと新聞で述べていたが、事はそう簡単ではないのである。アニミズム、多神教の日本と一神教との根源的差異が文化価値摩擦を呼び起こすことは明らかである。

1ヵ月前の訪米の際、日本も難民受入にもっと積極的になるべきであるという意見に対して、安倍首相が、970億円の拠出はするが日本は高齢者と女性の地位向上の問題もある、と答えたのはスウェーデンの事例を考えて見れば正論である。これは、安倍内閣の唯一といってもいい位の功績である。

政治家は、まず第一に自国民の利益、すなわち「自国民益」を考えなければならないのである。難民を受け入れるには、気の毒、可哀相といった感情に情緒的に瞬間反応するのではなく、まず予測可能な事態を周到に検討して用意しておく必要がある。それでも、不測な出来事の発生を免れないのが実情なのである。

私には、難民を非難したり誹謗したりする意図はない。人種差別観もないし、国粹主義者でもない。現に、私の妻は生粋のスウェーデン人で、私達の日常言語はスウェーデン語である。しかし、シリア難民について言えば、オバマ大統領が明言したように、非難され任を離れるべきは、自国民の多くのが脱出し難民とならざるを得ないほど統治能力を欠いている大統領のアサドである。統治能力の欠如が、難民を作り出しているのである。

9. 結語—芸術は文化価値の融合を促す

ここで、論調を変えて文化価値の融合を見ることにしよう。

ジプシーは、他の欧州諸国におけると同様、スウェーデンにおいても差別されている。しかし、

事が芸術に関係すると、差別観は無くなる。こうした現象は、どこの国あるいはどの地域においても見られるのである。その好例が、スウェーデンではカッレ・ユーラルボー（Kalle Jularbo, 1893年－1966年）である。

ジプシーの家系のユーラルボーは、作曲家であると同時に5才の時からアコーディオンに親しんだスウェーデン最高のアコーディオン奏者であり、また彼の作曲した多くのメロディーを知らないスウェーデン人はいないといわれる位、人々に親しまれた。80人ほどの寒村で生まれたユーラスボーは、音楽という芸術でジプシーの文化とスウェーデンの文化価値を見事に融合、構築したのである。

短い夏の夕べ、各地で行なわれる野外での音楽祭やダンスの場では、彼の作曲したアコーディオンの曲が流れ、人々はワルツを踊り人生を楽しんでいる。多くの作曲の中で、特に人々に好まれている曲『エーリンを夢見て』（Drömmen om Elin）の歌詞と直截的でなく意識に近い感覚的な拙訳を載せて、この小論を閉じることにしよう。

“Drömmen om Elin”

Vad jag drömt om dig
Lilla Elin lik som sommarns vind
Söt som socker strut
Med brun och fjunig kind
Under alla år
har jag burit med mig drömmen
Drömmen om Elin
Leende under en blommande lind

Vad min dröm ar skön där är du så ung och
varm och ljus
Solen i ditt hår
Ett avsked vid ditt hus
I min ensamhet vänder jag till drömmen
Drömmen om Elin
Barbent i tunn sommar blus

Elin i min dröm
Går ditt skratt mot skyn som en ballong

Du far
I min famn och vinden drar en sång
Det blev aldrig vi
Men jag drömmer ändå drömmen
Drömmen om Elin
Och om en sommar en gång

《エーリンを夢見て》

心に想うは君のこと
夏風のように爽やかで
綿菓子のように甘く
陽にやけた柔肌の頬
いつも夢見る君のこと
若樹の下で微笑んでいる
愛しのエーリン

心に抱くは君のこと
夕陽に映える金色の髪
君の家から帰るとき
はや孤独の念に麗われて
心を占めるは君のこと
素足に夏服の愛しのエーリン

夢の中のエーリン
笑声は風船のようにはじけ
歌声となって風にのっていく
夢だけど夢でもかまわない
あの夏がまた来て欲しい

参考文献・資料

邦文（訳文を含む）：

- 阿部謹也：『中世を旅する人々』，平凡社，1978年。
- 石渡利康：「ジプシーの自由と死とその周辺問題－『ジプシーは空に消える』（Таб ор ухолит в небо）からの小考－」，日本情報ディレクトリ学会誌Vol.11 2013年。
- 石渡利康：『性権と人間存在』，高文堂出版社，1987年。
- 石渡利康：『スカンジナビア法論集』，八千代出

版, 1986年。

- 石渡利康:「非領域的マイノリティー—欧州におけるロマ (Roma), 国際関係研究, 第18巻第3号, 平成10年3月。
- 石渡利康:「ヤンテの法と価値ニヒリズム—北欧福祉平等社会の基礎表象と変容—」, 国際関係研究, 第35巻第1号, 平成26年10月。
- 坂田正顕:「ヘテロトピアとしての巡礼空間」, 早稲田大学大学院文学研究科, 紀要第1分冊, 2013-02-26。
- 挽地康彦:「スウェーデンにおける移民統合のパラドクス」, 和光大学現代人間学部紀要第8号, 2015。
- 廣瀬浩司:「ヘテロトピアのまなざしと制度の身体」, 言語文化論集, 第44号, 筑波大学, 1997年。
- 南直哉:『善の根拠』, 講談社, 2014年。
- 三好範英:『ドイツリスク 「夢見る政治」 が引き起こす混乱』, 光文社, 2015年。
- クレボン・マルク:『文明の衝突の欺瞞』(白石嘉治編訳), 新評論, 2003年。
- フランシス・フクヤマ:『歴史の終り』(渡部昇一訳), 三笠書房, 1996年。
- ハンチントン, サミュエル:『文明の衝突』(鈴木主悦訳), 集英社, 1998年。
- トッド・エマニュエル:『「ドイツ帝国」が世界を破滅させる』(堀茂樹訳), 文芸春秋社, 2015年。

スウェーデン語:

- Aftonbladet. Lördag 26 September.
- Debatt. Fredag 9 oktober 2015.
- “Flyktingmottagandet”. STV Inrikes. Stockholm vill bryta mot lagen för att hjälpa flyktingar. 2015-9-25.
- Migrationsverket: Den svenska flyktingkvoten. 2015-05-12.
- Migrationverket: Lagar om asyl, lagar om vård och samhällsvård (Migrationsinfo. se)
- Sandaren: Minoriteten av som får stanna är enligt internationell lag. 2015-09-15.
- STV. Presskonferansen om flyktingstationen. 2015-10-9.

- TT. Elisabeth Mormorstein. pub. 21-10-2015.

デンマーク語:

- Danmarks historien. dk., Invandring til Danmark efter 1945. Aarhus Uni., 2014.
- Flyktingfakta. info, Danmark,
- Ross, Alf: Om ret og retfaerdighed. Reizel. 1953.

フランス語:

- Fernand Beckmann, Dan: Benevolat et solidarité. Syros, 1992.
- Foucault, Michel: “Des espaces autres”. EMPAN, 2004/2 (nr. 54)

英語:

- Baille, Caroline & Kabo, Jens: Heterotopia: Alternative Pathway to Social Justice. Zero Books, 2013.
- Giugni, Marco and Passy, Florence (eds.): Political Altruism? Solidarity Movement in International Perspective. Rowman Littlefield Publishers. 2001.
- Miller, John: The globalization of Spaces: Foucault and Heterotopia. Routledge. 2015.
- The Cultural Reader. Article summaries and Reviews in Cultural Studies. May-11-2011.